2018 年 11 月クルディスタン報告書

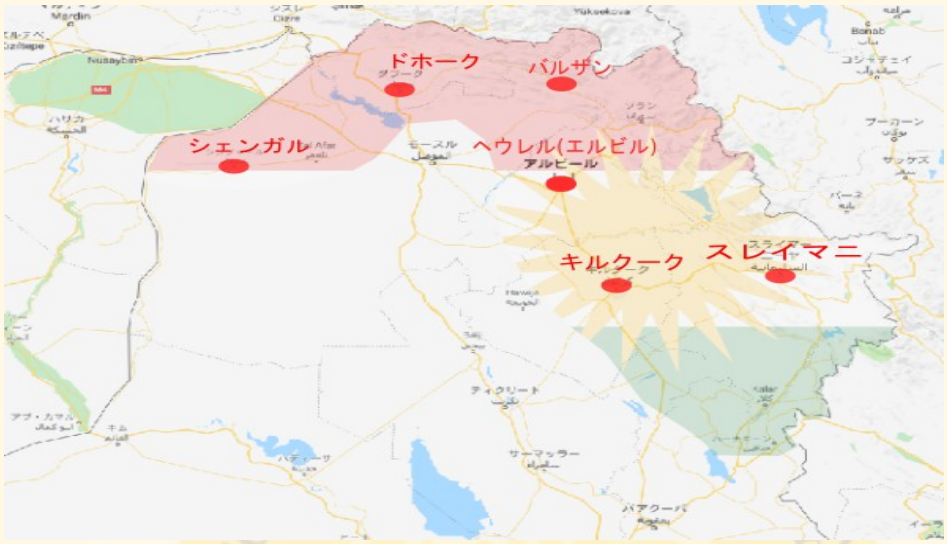
Reporta Kurdistanê Mijdarê 2018'ê

出典：パリ・クルド研究所

一般社団法人　日本クルド友好協会

南クルディスタン（イラク北部クルディスタン地域）

Başurê Kurdistanê



中央政治

‣KDP—PUK 同盟

KDP のスレイマニ代表アリフ・タイフールは 1 日、ハラブジャのクルディスタン愛国者連盟（PUK[1]）事務所訪問中の記者会見において、PUK の協力なしでは政府の運営は不可能だと発言した[1 日、ルダウ]。PUK の報道官もまたメディアの取材に対して、KDP との関係を結婚に例え離反することがないことを確認した[4 日、ルダウ]。力関係が KDP に有利な現状、KRG は KDP に牛耳られ PUK は多数派維持の道具に貶められるという疑念は党内に根強い。PUK は 9 月末の選挙直後に結果を認めないという声明を出し、後にそれを訂正するといった一幕もあった。選挙結果に不満を持つ野党が、PUK にも批判的姿勢を強めることも逆風となっている。PUK は 27 日の政治局の会議において、KRG 新内閣での真の提携関係と共同意思決定を求めた[27 日、ルダウ]。この会議にはイラク大統領に就任したバルハム・サリフも出席した。KDP と干戈を交えたこともある PUK が存在感を発揮し、時には KDP を抑えることができなければ、一般クルド人の KRG への失望感は深まるばかりだ。

‣バルザニの内・外遊

マスード・バルザニは先月同様、KRG の外交官さながら中央政府関係者と会談を重ねている。21 日には、昨年の住民投票以来初めてバグダッドを訪問した[21 日、バスニュース]。KRG 次期首相に指名された息子

1 英語名 Patriotic Union of Kurdistan の略称。クルド語では、Yekîtiya(統一) Niştmanîya(民族主義者) Kurdistan を略して YNK。また Yekîti とも呼ばれる。

マスルールを伴った。22 日、イラク新首相マフディと会談した[22 日、ルダウ]。マフディはバルザニの訪問を「名誉」だと賛辞を送った。互いにバルザニを「マスルールの父」、マフディを「ハーシムの父」とあだ名で呼ぶことを認めたように、友好ムードの演出に終始した。バルザニはクルディスタン地域への帰還後、マフディを「クルド問題を理解している」と評価した[28 日、ルダウ]。今後の関係強化を期待すると発言した。続いてイラン支援下の民兵組織「バドル軍団」指導者のハディ・アメリとも会見した。アメリは昨年のキルクーク占領の立役者であるが、ペシュメルガとバドル軍団による IS への共闘に触れ、バルザニ訪問を「新たな扉を開けた」と評価した。その他マリキ等有力者との会見を友好ムードの内に終わらせた。クルディスタン地域代表というよりかは、中央政界の新たな大物としての挨拶回りの様相を呈していた。

その後クウェートと UAE のアブダビ首長国を訪問した[28 日、バスニュース]。クウェートでは、KRG と同国との関係強化や、イラクの政治状況他について協議したとされる。一連の湾岸訪問を「実りのある」ものだったと表現した。キルクークの原油輸出再開に伴うパイプライン再開通が念頭にある。湾岸諸国はイラクを通るパイプラインに食指を伸ばそうとしている。湾岸との関係構築は中央政府との有力な交渉材料になる。

‣野党内部の動揺

野党は先の選挙における KDP の不正疑惑を追及し対決姿勢を強めていた。一方で野党勢力の中では選挙結果を巡り指導部への突き上げが起こっている。最大野党であるゴラン（変化運動）は、党内選挙を実施することを明らかにした[5 日、ルダウ]。指導部はこの選挙を党綱領の改正につなげると表明しており、ヌーシーラワン・ムスタファという結党時のカリスマを失った後の新たな党の形を作るという意味も大きい。選挙での敗北を機に党存続の課題に切り込んだ形だ。以前の選挙前に、かつて PUK を離党しゴランに加わった者の内少なくない数が PUK へ復帰したとも言われる。

現イラク大統領であり PUK から分派し民主主義と正義連合(CDJ[2])を設立したバルハム・サリフは、大統領職と引き換えに PUK へと復帰した。しかし党は存続している。サリフは残る幹部たちに解党を勧めたという。[5 日、ルダウ]。サリフに従い PUK を離党した党員が復帰を望んでいることを念頭に置いての勧告である。これに対し幹部は解党を拒否し改称することで存続を目指すとした。14 人の発起人のうち 11 人が PUK 出身者であり、党を存続させても彼らが PUK に復帰すれば有名無実化されると指摘された。とはいえ現在党を率いるアラム・カディル等は CDJ に政治生命を賭けたのであり、おいそれと自党を解党し PUK の数合わせの一人になることはできない。また CDJ 支持者も PUK に協力しようとはしない。カディルは 9 日、CDJ を解消し新たに「国民連合」の立ち上げを発表した[9 日、ルダウ]。CDJ 同様「党」ではなく「連合」であることで、既存の政治に不満を持つ様々な党派を受け入れる余地があるという。また指導部はバルハム・サリフとの個人的な関係は続けると表明した。

2　英語名、Doalition of Democracy and Justice の略。クルド語名は、Koalîsyona(Coalition：連合) Demokrasî û Edaletê(公正)。

キルクーク問題

‣アラブ化政策の推進

中央政府に任命されたキルクーク知事であるジャブーリは、80 以上のシーア家族をキルクークへ入植することを決定した[1 日、ルダウ]。1 日には、シャンマル族とおぼしきアラブ系部族民がキルクーク近郊のダクークに押し入りクルド人の村民を追い出そうとしたものの、クルド人の抵抗により退散するという事件が発生した[1 日、ルダウ]。アラブ人現地人によるとこれまではペシュメルガが同地を防衛していたことで、クルド人とアラブ人の力関係は保たれていた。昨年 10 月に人民動員軍によりキルクークが占領され、シーア政府はサダム時代と同じ油田地帯のアラブ化に取り組むことが可能になった。中央政府の方針を背景に、アラブ人は人民動員軍の武力を利用しクルド人の土地を奪取することが可能になった。こういったこともありキルクーク西部のかつて 40 カ村のクルド人村落があった地域では今やアラブ人入植者の暴力により 2 カ村しかクルド人村落は残っていないという[25 日、ルダウ]。シーア政府はサダム時代と全く同じ民族浄化政策を遂行している。サダムは同じアラブ系であるが反政府傾向の強いシーア住民をキルクークへ入植した。現在権力を握るシーアは敵対するスンニ・アラブ住民をクルド人追放の先兵にしている。知事ジャブーリは民族浄化の先兵たるスンニ部族兵にクルド人の耕地を配分する決定を下した[15 日、ルダウ]。シーア民兵勢力はスンニ・アラブ地域において多数の人権侵害行為を重ねたとされる。対クルドとなると奇妙な協力関係を見せる。KDP はキルクーク問題の解決に向けてスンニ部族との交渉を始めた[8 日、ルダウ]。KDP がキルクークの正常化に向け提示する解決案は各民族による共同統治と共同防衛だ。KDP はまたキルクーク住民として大きな比重を占めるテュルクメン系も交渉相手にする。スンニ・アラブはシーア政府に虐げられながらも、自らの政府を持たない存在としてクルド人と同盟を組むメリットは大きい。

‣原油輸出の再開

イラク石油省報道官は 16 日、KRG 管理化のパイプラインを通じたキルクーク石油の輸出再開を許可すると発言した[16 日、ルダウ]。KRG 首相ネチルワン・バルザニはイラク中央政府の決定をクルディスタン地域との問題解決に向けた「前向きな姿勢」と評価した[19 日、ルダウ]。イラク中央政府は昨年キルクークを奪取した後、石油を「宗主国」イランへ国境を通じ送っていた。しかしトランプが核合意を破棄しイランへの制裁へ踏み切ったことで風向きが変わった。また 5 月の選挙で KDP がイラク第 4 党に躍り出たことも交渉の後押しとなった。外的要因の変化を KDP は巧みに利用し先ずは輸出の権利を奪還した。

前述のマスード・バルザニによる湾岸訪問は、イラク北部からトルコを通るパイプラインを利用した湾岸諸国の意向をくんだものであった。国内に「クルド問題」を抱えることのないこれら諸国とは、純粋に損得勘定のみで交渉することができる。湾岸諸国との関係はイラク中央政府の背後をつく外交カードにもなりうる。

ISの脅威

キルクークではイラク中央政府の無策によりクルド人住民がISの攻撃にさらされる状況が続いている。ISの襲撃を受けたキルクークの村民は治安部隊、連邦警察の警備の甘さを指摘した[13日、ルダウ]。彼らは主要道路にしか検問所を設けておらずISはどこにでも出没できる状況なのである。現地を支配するイランの支援下にある民兵集団も治安維持における怠慢のツケを払わされている。トゥズ・フルマトゥではヒズボラ・ヌジャバ運動の拠点が爆弾攻撃を受け少なくとも2人が死亡し30人以上が負傷した[3日、バスニュース]。各地でイラク治安部隊とアメリカ軍の共同作戦により多くのIS戦闘員が殺害されているのに襲撃事件は収束の気配を見せない。有志連合は10日、空爆により13人のIS戦闘員を殺害した[10日、ルダウ]。山賊化したISはこのようなピンポイント攻撃では掃討できない。ISが出没する地域に部隊を展開しISの隠れ家を一つ一つ潰してい治安回復の方法はない。そのためには人民動員軍のキルクーク侵攻以前にこの地域の治安維持をしていたペシュメルガの協力が必要である。

トルコの侵略行為

トルコの無差別爆撃

トルコはクルディスタン労働者党(PKK[3])の掃討を名目にイラク領内に部隊を展開しクルド住民を標的にした爆撃が続く。14日にはドホークでトルコ空軍の空爆によりKDPのペシュメルガが死亡するという事件が起きた[15日、ルダウ]。KDPがトルコの同盟相手なのは周知の事実であるが、その部隊が展開する地域にもトルコは構わず攻撃するのである。

トルコの主要攻撃目標であるPKKは活動を控えているとも言われる。現地当局関係者はメディアに対しPKKの動静を以前より耳にしなくなったと発言した[14日、ルダウ]。後述のアメリカによるイラク領内のPKK司令官への懸賞金設定が影響していると指摘した。

自由運動への弾圧

PUKはKDPとトルコへの配慮から亡命クルド人の活動への弾圧を始めた。PUKは27日、PKKに近い合法政党「クルディスタン自由社会運動(自由運動)」に対し24時間以内の事務所の閉鎖を要求した[27日、バスニュース]。翌日にはヘウレル(エルビル)含め各地で警察が事務所を強制的に閉鎖した[28日、ユーフラテスニュース]。PKK系メディアはゲルミヤン地域のケラルにおいて警察は一時関係者の抵抗により事務所の閉鎖に失敗したと報じた[29日、日報]。その後その事務所は夜に再度訪れた警察により閉鎖され幹部は逮捕されたが、ゴランの議員が現場を訪れたことでそれら幹部は釈放されたという。新生代は一連の弾圧をクルディスタン地域の政治的自由に対する挑戦と批判する声明を出した[29日、日報]。トルコはPUKの措置について「正しい行動」と評価した[29日、ルダウ]。PUKはトルコとの直通便開通を求めているとも言われる。アメリカもこの措置に間接的に関与する。アメリカはシリアにおいてクルド勢力への支援を継

3 クルド語名、Partîya(党) Karkerên(労働者たちの) Kurdistanê(クルディスタンの)の略。日本のメディアで散見される「クルド労働者党」の呼称は誤り。

続する一方トルコとの関係も維持しようとしている。後述の PKK 司令官への懸賞金設定と合わせてイラクの PKK への弾圧を容認することでトルコへ配慮を示したものと見られる。

9 月の選挙における不正疑惑について野党は連邦警察の介入を求めたが、自由運動もまたバグダッドを利用する素振りを見せる。自由運動報道官はバグダッドの連邦裁判所に訴える用意があると表明した[29 日、日報]。一方で対話による問題解決の道も提示した。

弾圧は文化方面にも及んだ。PUK 当局は 28 日、翌月に公開を控えたトルコ領アメド(ディヤルバクル)の刑務所におけるクルド人受刑者への虐待をテーマにした映画の公開を中止させた[28 日、ルダウ]。この映画監督は警察から中止の理由を明らかにされなかったと語った。

PUK は KDP よりもリベラルな統治をしていると自負する。これは KDP より勢力が劣るかわりに多数の野党勢力を味方につけるという戦略でもある。PUK は自らに求められる役割を放棄すれば KDP の数合わせか、ゴラン他弱小野党に転落に直面することになる。

ロジャバ(西クルディスタン、北シリア)

Rojavayê Kurdistanê

ジャジーラの嵐

›トルコの妨害

人民防衛隊(YPG[4])を中心とする北シリア連合軍シリア民主軍(SDF[5])は、デリゾール市北方のハジン攻略に取り掛かり IS 掃討作戦は最終局面を迎えている。ハジンは現在の IS の首都とも言える拠点だ。先月末のトルコによる北シリアの攻撃により一時作戦の中断を余儀なくされた。トルコは今月初頭まで国境地帯の攻撃を続けた。クルド系メディアはトルコ軍が 1 日、ギレスピ(タルアビヤド)で民間人を攻撃したと伝え

4 人民防衛隊のクルド語、Yekîneyên(部隊) Parastina(防衛) Gel(人民)の略。
5 シリア民主軍の英語名 Syria Democratic Forces の略。彼ら自身はアラビア語名 Quwwāt(部隊) Sūriyā(シリア) al-Dīmuqrāṭīya(民主的)の略 QSD をよく用いる。またクルド語では Hêzên(「力」すなわち軍の意) Sûriya(シリア) Demokratîk(民主的)を略して HSD と呼ばれる。

た[1 日、ユーフラテスニュース]。有志連合を主導するアメリカ軍将官はクルド、トルコ双方と接触し事態の鎮静化を図っていることを明らかにした[2 日、ユーフラテスニュース]。IS は 4 日、トルコの介入を好機とし反撃に打って出たが多数の死者を出し失敗に終わった[4 日、ハワルニュース]。IS はこれに懲りずに 22 日、大規模な攻勢を行った[23 日、シリア人権監視団]。タナク油田並びに浄水場の奪取を狙った攻撃であると分析される。有志連合軍の航空機が緊急発進し空爆に向かったが悪天候に阻害された。しかしその日の内に天候は回復し激しい空爆が IS の進撃を阻止した。さらに 26 日にも再度 IS はタナク地域を狙った攻撃を仕掛けたが失敗した[27 日、シリア人権監視団]。一連の IS の反撃はトルコとテロ組織とのつながりという疑惑に火をつけ、クルド人やそのシンパは盛んにトルコの IS 支援についてプロパガンダを発信した。トルコにその意図がないにしてもこの時期のクルド人の軍事的威圧は悪手であった。

SDF は当面のトルコの全面侵攻がないことを見込み 11 日に作戦の再開を発表した[11 日、ユーフラテスニュース]。クルド側はこの町を攻略において軍事的な困難はない。進捗は政治的要因、すなわちトルコの動向に左右される。アメリカはトルコとの関係維持よりも IS の壊滅を優先してきた。本作戦に支障がでる事態になればアメリカはトルコに強硬な態度に出ることをクルド側は計算に入れている。トルコは対 IS 作戦の最終局面という時期に北シリアへの侵攻を仄めかすことでアメリカの不興を買いまた一歩アメリカとの溝を広げた。エルドアはクルド人の離間策にまたしてもまんまと引っかかったのである。

‣作戦の犠牲

SDF、有志連合の IS 掃討作戦が順調に進む一方で少なくない犠牲が発生している。フォックスニュースはアメリカ軍関係者が下旬の IS の反撃により SDF に多数の死者が出たことを明らかにしたと報じた[28 日、報道陣]。

より重要なのは民間人の犠牲である。シリア人権監視団によれば 1 週間の空爆で子供 80 人を含む 105 人以上が犠牲になったと報じた[15 日、シリア人権監視団]。アメリカ軍の空爆による犠牲はアサド政権、トルコにとって丁度いい反米、反クルドのプロパガンダの材料となっている。初めから民間人を狙っているトルコ軍と異なり、アメリカ軍の空爆による犠牲は IS の人間の盾戦術によるところが大きい。丁度反体制派がアレッポや東グータで病院他民生施設に対空砲を設置したりと軍事拠点として利用し空爆を誘引し、いざ空爆されると民間人の犠牲を騒ぎ立てていたのと似ている。SDF は 2016 年のマンビジュ攻略時と同じく時間をかけて攻略することで民間人の犠牲を避け人質の解放も行っている。

ユーフラテス東岸地域

‣トルコ軍侵略の危機

先月末にエルドアンがユーフラテス川東への侵攻作戦について表明し国境地帯への砲撃を実施して以来、トルコ軍による北シリア侵略の危機は高まっている。エルドアンは IS もクルド人もテロリストだと主張し、シリア侵攻は安全保障のため正当な措置だと詭弁を弄している。政権寄りコラムニストは国境地帯で自動車爆弾が押収されたことから対テロ作戦という政府の主張の正当性を訴えた[3 日、「新たなる夜明け」紙]。本音では反体制派を通じたシリアの侵略が失敗に終わった今シリア有数の天然資源を有し肥沃な北シリアを支配下。トルコ軍による越境攻撃が続く中、有志連合軍の報道官は SDF とトルコ軍の双方と調整をしていることを明らかにした[2 日、ユーフラテスニュース]。アメリカは自国の対応によってトルコが北シリア侵攻に踏み切ることがないように対応には細心の注意を払っている。クルド人はアメリカの八方美人的態度を批判するが戦争を避ける方法は他に無いのが現実だ。アメリカ国防長官マティスはトルコ―シリア国境に監視所を設立すると発表した[22 日、ロイター]。マティスはさらなる北シリアへのアメリカ軍部隊の増派を否定した。トルコの軽挙妄動を制止するための手軽な措置である。またレーダー基地建設とあわせて北シリアの「クルディスタン地域」化をするための布石でもあるのは明白だ。
トランプはかつてアメリカ軍が撤退する代わりにアラブ有志連合軍を結成し北シリアに駐留させる案を出したことがある。26 日湾岸協力会議の代表団がコバニを訪問した[27 日、シリア人権監視団]。クルド側は本件について発表をしておらず訪問の意図も不明であるが、アラブ軍駐留の件であることに疑う余地はない。カタールとの断交、カショギ氏殺害事件を巡りトルコとの対立を深めるサウジはトルコに反撃するいい機会と言わんばかりにこの話に飛びついた。実権を握る皇太子ムハンマドは特に「敵国」カタールにトルコが軍事基地を置いていることに業を煮やしている。北シリアにサウジ軍部隊を駐留させればその意趣返しとなる。ムハンマドはトランプと仲がいいことで知られる。トランプとしても頼みやすい相手であろう。

‣カギとなる部族勢力との同盟関係維持

トルコはユーフラテス川東岸地域への侵攻に先立って大量の工作員を潜入させていることを先月の報告書で触れた。トルコによる工作の主要目標はアラブ系部族を煽動し SDF に対する反乱を起こさせることだ。かつて IS は複雑な部族勢力の均衡と対立を利用し北シリアを手中に収めた。トルコは支援していた IS なき今直接部族勢力を傭兵として利用することを狙う。トルコは自国領内に避難したシリア難民から身分証を取り上げ工作員に渡している[20 日、シリア人権監視団]。SDF はこのようなトルコの策謀を未然に防ぐべく部族勢力との関係強化を図っている。SDF は 16 日ユーフラテス地域の大部族の指導者たちを集めた会議を実施した[16 日、ユーフラテスニュース]。SDF 担当者は集まった部族の指導層に対しトルコの特殊作戦について説明し、地域を不安定化させるトルコの動きに加担することがないよう訴えた。

‣シリア市民対話

シリア民主会議（MSD[6]）は 28 日よりシリア内戦の民主的解決方法を議論するため「シリア市民対話」を実施した[28 日、ハワルニュース]。MSD によればシリア各地から反体制派や政治勢力が招待された。議題は「シリア危機における人道問題」、「（ロジャバ）の脱中央集権化、民主的政府は自治政府の見本であるか」、「経済問題」と「あるべき将来のシリアの政治体制」であった。この対話集会は 7 月にも実施されている。回数を重ねることでトルコの傘下に入ることをよしとしない反体制派の糾合を目指す。筆者は在イラクの民主統一党(PYD[7])関係者より PYD だけが真の反体制派だと語っているを聞いたことがある。PYD はトルコと対抗するためにアサド政権と軍事的に協力することはあれど政治的にはあくまで野党勢力であり続ける。シリア反体制派は 7 年以上も戦闘を続け多くの国民の血を流し結局アサドの勝利を許した。元々アサド政権打倒以外に明確なビジョンを持たない彼らはシリアの民主化に前進をもたらすことなく今やトルコの傭兵に成り下がっている。PYD はこうした反体制派の堕落から戦線離脱し北シリアへ逃れた政治勢力とは協力する姿勢だ。シリア民主化のための真の政治闘争が静かに始まっている。

マンビジュ(Minbic)

‣トルコ・アメリカの警備と緊張

有志連合軍とトルコ側部隊はマンビジュ北方のサグル川を境界線として対峙する。アメリカ軍は SDF の防衛を続けながらトルコ軍との緊張を緩和するための措置も行う。アメリカ国防総省報道官は先月 30 日トルコ軍部隊と初の共同警備活動に向けて準備が整ったと発表した。1 日アメリカ軍とトルコ軍部隊は初の共同警備活動を実施した[1 日、トルコ詳報]。5 日にはアメリカ軍部隊は現地を防衛するマンビジュ軍事委員会(MMC[8])と共同警備活動を実施した[6 日、「自由」紙]。

MMC によれば、トルコ軍傘下の傭兵勢力は MMC の陣地へ銃撃を行った[23 日、MMC]。

‣SDF の味方

マンビジュのテュルクメン協会はトルコの「野蛮」な行いを非難する声明を出した[1 日、MMC]。

テュルクメン協会は今年 4 月にマンビジュのテュルクメン人によって設立された。北シリア全体のテュルクメン人の利益に資することを目指す。シリアのテュルクメンを代表すると称する団体ではシリアテュルクメン会議が有名である。いわゆるシリア反体制派に属し、本部がトルコのイスタンブールにあるように汎トルコ主義の先兵である。テュルクメン人の利害を代表する政治勢力ではないため北シリアの多くのテュルクメン人はその勢力下にない。マンビジュのテュルクメン協会はトルコの拡張主義からテュルクメン人を救うため SDF と協力関係にある。

6 クルド語の正式名称 Meclîsa(アラビア語で会議の意) Sûriyeya(シリア) Demokratîk(民主主義)の略。英語名 Syrian Democratic Council's の略称 SDC も使われる。
7 PYD—民主統一党のクルド語、Partîya(党) Yekîtiya(統一) Demokrat(民主)の略。
8 英語名 Manbij Military Council の略。クルド語では Meclîsa(会議) Leşkerî(兵士) ya Minbicê(マンビジュ)。彼ら自身はアラビア語名 almajlis(会議) majlis manbij leaskari(兵士)を用いる。正式名称は「マンビジュ並びに郊外防衛のための軍事委員会」。

マンビジュの運命を左右するのはアラブ系部族の動向だ。トルコ寄りの反体制派メディアは、SDF 掃討を要求するアラブ系部族の声明を伝えた[29 日、シリアの声]。声明の中で部族の不満は MMC による募兵である。MMC はアラブ系若者の参加を盛んに PR している。その中には当然部族民も多くいるが、部族からすると兵を奪われている感覚なのである。部族において若者は縄張り防衛のための重要な兵力である。今のところ MMC—SDF の支配を揺るがす反乱が発生したという情報はない。トルコの攻撃が迫れば勝ち馬に乗ろうと決起する部族も現れる。SDF は機会主義の権化ともいうべきアラブ系部族の対応に神経を尖らせている。

アフリン(Efrîn)

›トルコによる傘下勢力の粛清

トルコ軍に従軍する反体制派傭兵勢力によるアフリン住民への略奪、身代金目当ての誘拐は激化し、傭兵集団同士の分け前を巡る小競り合いも頻発するようになった[2 日、シリア人権監視団]。トルコ軍はこれまで乱暴狼藉を黙認してきたことにより規律は崩壊の危機に瀕し、またトルコ側勢力に対する市民感情も最悪であった。こうした状況は YPG にアフリン地域内で暗殺や爆弾攻撃といった特殊作戦を実施することを可能にした。トルコ軍は事態を憂慮し傭兵勢力の粛清を余儀なくされることとなった。18 日未明トルコ軍は「東方の民」や「宗教守護団」といった傭兵集団の排除を開始した[18 日、ユーフラテスニュース]。

トルコ軍はまた軍属を含む外出禁止令を始めて発布した[18 日、シリア人権監視団]。トルコ軍は早期の事態鎮静化に失敗し多数の重火器とより多くの兵力の動員を強いられ、アフリン市民のみならず傘下勢力にも無能ぶりを晒した。作戦は翌日には完了し「東方の民」の戦闘員にイドリブへ退避するよう勧告した[19 日、ユーフラテスニュース]。政権寄り新聞は「自由シリア軍は市民の財産を犯すギャングの平定に成功した」と報じた[19 日、「朝刊」紙]。しかし数日後追放された「東方の民」の戦闘員の大半がアフリンへ帰還したことが明らかになった[26 日、シリア人権監視団]。28 日トルコ情報機関と憲兵隊は指揮官を含むこれら出戻り傭兵たちを逮捕した[29 日、シリア人権監視団]。この粛清後もアフリンの治安は回復せず女性、子供 9 人の集団が市内のバス停から出発した後失踪するという事件が発生した[25 日、シリア人権監視団]。また粛清が続く 19 日に YPG は傭兵の「憲兵隊」司令部への爆弾攻撃を成功させた[20 日、ユーフラテス

ニュース]。結局トルコ軍は一連の騒動において傘下勢力を上手く制御することはできないことを内外に示した。イドリブでは支援していたとはいえ扱いが難しいヌスラのような勢力がいることでまだ言い訳の余地もある。トルコ軍は完全に指揮下にある「オリーブの枝」部隊にすら統制を及ぼす能力がない。プーチンはエルドアンがシリア和平の実現のため反体制派勢力の影響力の行使を約束したことによりイドリブ総攻撃を一旦停止させた。イドリブでは停戦違反が相次ぎトルコの「影響力」の効力の程は疑われている。支配下にある地域の治安を安定できないようでは、シリア和平の枠組みにおいてトルコが役割を果たすための前提条件は既に破綻している。

‣女性の人権を踏みにじる反体制派

アフリン始めトルコ軍支配下の北シリア各地において、傘下の反体制派勢力による女性への性暴力やイスラム的価値観の押し付けはクルド人によって多数告発されてきた。シリア反体制派戦闘員による妹とされる女性の殺害を収めた動画は、反体制派支配と女性の抑圧に光を当てることになった[12 日、情況]。原因は妹がトルコ軍将校と関係を持ったことによる名誉殺人とされる。

反体制派勢力が公開する動画に女性が映っているのはほぼ皆無なこと、市中の動画において女性は必ずベールをしていることに気付く。一方、クルド側の動画では女性兵士は勿論、ベールをしない女性市民も多い。またアサド政権側にも女性兵士はいるしダマスカス他の映像にはベールをしない女性が多数みられる。シリア・アラブ軍の補助民兵組織「祖国防衛隊」にも多数の女性兵士が在籍することは知られる。

「自由シリア軍」を名乗るシリア反体制派は女性の自由については関心がないように見える。マイノリティの権利についても同様だ。彼らがアサド政権をアラウィ―派の独裁と誤った規定により批判したり、クルド人に対する権利付与を拒否する等、少数派に対する偏狭な姿勢がシリア全土で支持を得られない要因になっている。シリア反体制派はスンニ・アラブ男性だけが自由な、言い換えれば絶対的な優位性を持つ社会を目指していると言わざるを得ない。トルコ支配下の北シリアでは、トルコ人のクルド人への蔑視と相まって、このような本音が露骨にあらわれているのである。

‣反体制派の毒ガス攻撃

シリア国営通信は 24 日、反体制派勢力がアレッポに毒ガス攻撃を行ったと報じた[24 日、シリア国営通信社]。107 人もの市民が被害にあったとされる。シリア・アラブ軍は反撃のためアレッポ郊外に激しい砲撃を加えた[29 日、シリア人権監視団]。反体制派勢力はアレッポ解放以前にクルド人居住区のシェイフ・マクスードに繰り返し毒ガス攻撃を繰り返していた。アサド政権によるアレッポ解放の際反体制派勢力の兵器工場が暴かれたが、トルコ製の薬品を調合し化学兵器を作る施設も発見された。欧米諸国はアサド政権の毒ガス疑惑を追及する一方で反体制派勢力の犯罪には見て見ぬふりをしてきたことから、彼らの化学兵器製造と使用は国際的に周知の事実とはなっていない。そのため反体制派勢力は政権側地域への威嚇のため今回も使用したわけだが、停戦が崩壊の危機に瀕している時期にアサド政権へ格好の口実へ与えることになった。停戦の反故と人道問題によりエルドアンの威信を二重に傷つける愚挙であった。

北クルディスタン(トルコ領南東部)

Bakurê Kurdistanê

クルド人への弾圧

‣欧州人権裁判所を蔑ろにするエルドアン

欧州人権裁判所は 20 日、投獄されているクルド系政党人民民主党(HDP[9])元共同代表セラハッティン・デミルタシュの釈放を命ずる判決を下した[20 日、クルディスタン 24]。デミルタシュの拘束の恣意性、違法性を指摘した。エルドアンはすかさず欧州人権裁判所の判決に拘束力はないと発言した[20 日、アナトリア通信]。HDP はクルド語ツイッターで政府に対し速やかに判決内容を実行するよう求める声明を発表した[20 日、@KurdiHDP]。一方で EU はトルコを最重要の戦略パートナーであると再確認した[23 日、情況]。トルコは難民問題で EU 諸国特に中心国ドイツを恫喝しているため、EU はシリアのアサド政権に対するような思い切った措置に出ることができない。

‣PKK40 周年の恐怖

27 日は PKK の創立記念日であり 40 周年を祝う行事が行われた[27 日、ユーフラテスニュース]。北シリアやイラクでも祝福された。トルコ当局は PKK40 周年の節目に合わせてクルド人の自由を求める機運の高まりを打ち壊すため各地で摘発に力を入れた。1 日特殊部隊はシルナフ(シルナク)で大物ゲリラを逮捕したとする映像を公開した[1 日、アナトリア通信]。映像はゲリラが服を脱いで投降する様子を収めており反クル

9 トルコ語の党名、Halkların(諸人民または国民の) Demokratik(民主主義) Partisi(党)の略。Halk はアラビア語で人民を意味する halq に由来する。

ドプロパガンダとして十分な内容である。6 日アンカラで 300 人以上の警察、特殊部隊を動員した摘発作戦が実施され 21 人が逮捕された[6 日、アナトリア通信]。16 日にはアダナで 16 人が逮捕されたと報じられた[16 日、TRT ニュース]。29 日にはクルディスタン各地で 34 人を逮捕したと治安当局より発表された[29 日、アナトリア通信]。トルコが恐れているのは「ユーフラテス川東岸への侵攻」を実行する場合に、YPG の抵抗に遭いシリアで泥沼に陥る中自国領内で PKK が決起することである。

来日したこともある映画監督カズム・オズ氏が 24 日故郷のデルシムで逮捕された[25 日、情況]。嫌疑はテロ組織とのつながりという恣意的なものであり、翌日には渡航禁止措置を受け釈放された。オズ氏は今年 4 月末から 5 月初頭にかけて映画「Zer」の日本公開のため来日していた。その映画のテーマはトルコ軍によるデルシム虐殺の記憶を追うというものである。

アメリカとの関係

‣雪解けムードとリラの春

先月中旬エルドアンはアメリカ—トルコ両国の懸案であったアメリカ人牧師ブランソン氏を釈放した。制裁が撤回されたことでリラに回復傾向が生じている。リラは対ドルレートで 3 ヵ月ぶりの高値をつけた[2 日、情況]。有識者はトルコ財界に燻る懸念の声からトルコ経済の危機は去っていないと警鐘を鳴らした[2 日、情況]。一連のリラ危機が明らかにしたのはトルコの経済問題の原因は根深く、ちょっとした制裁でかくも簡単に危機に陥いるということであった。アメリカとの関係が少し改善したからといってトルコの危機は去っていない。

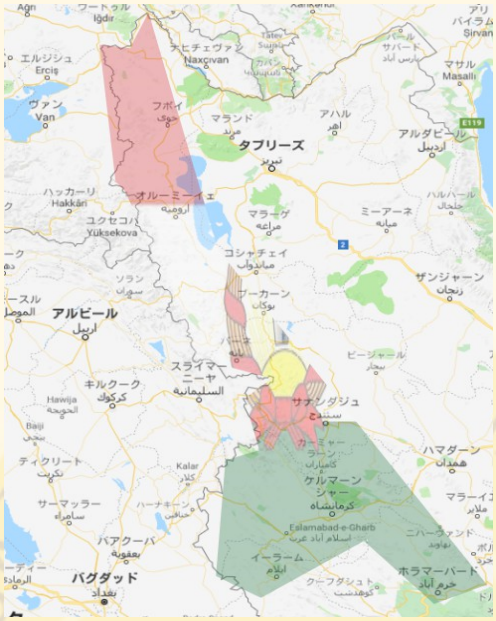
‣戦略的関係の行方

アメリカはジェミル・バイクら PKK 主要幹部に合計 12 億円以上の懸賞金を設定した[7 日、ロイター]。

アメリカは同盟国トルコへの配慮から PKK をテロ組織に指定してきた。PKK は反政府勢力ではあるがイスラム過激派のように民間人を狙うテロ組織ではない。また PKK はアメリカを敵視しておらず、IS やアルカイダのようにアメリカ人を誘拐・殺害することもない。つまり今回の懸賞金設定は何ら実行を伴わないトルコへのポーズである。トルコは先月ブランソン氏解放を行ったが、アメリカはマンビジュ問題の解決を棚上げしシリア国境への監視所の設置を打ち出した。そこで譲歩を迫られたアメリカがトルコに渡した空手形が今回の PKK への措置であった、

東クルディスタン(イラン領西部)

Rojihilata Kurdistanê



クルド人労働者の虐殺

イラン当局はクルド人ポーター「コルベル」の殺害を続けている。3 日イラン当局はケルマンシャーでコルベルの一団に発砲し 1 人が死亡した[4 日、ユーフラテスニュース]。11 日にはマリワンでイラン当局の銃撃により 1 人が死亡し、ウルミアやサルマスでも攻撃がありそれぞれ 1 人が死亡した[12 日、ユーフラテスニュース]。29 日にはイラクのクルディスタン地域に近い地域でイラン当局がコルベルを銃撃し 1 人が死亡した[29 日、バスニュース]。イランのムッラー政権はクルディスタンの経済開発を放置した結果生まれた無数の荷運び人を無慈悲に殺害し続けている。

続く民衆の反乱

所得の停滞と経済的格差に対する怒りによるイランのムッラー政権の動揺が続く中、人々は小さな問題でも妥協をしなくなっている。20 日鉄鋼労働者は当局に逮捕された同僚を奪還すべく抗議運動を行った[20 日、モジャディーネハルク]。抗議運動参加者は「我々は恥を受け生きることを選ばない」とシュプレヒコールをあげたという。ムッラーたちはかつて自らが打倒したパフラヴィ王朝末期を思い出しているだろう。

文責:一般社団法人日本クルド友好協会 研究員 並木宜史